京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第二十六卷　第四號

昭和三年四月一日發行

論叢

臺灣の小作制度……法學博士　河田嗣郎

相續稅の補完としての贈與課稅……法學博士　神戸正雄

保險學の本質……經濟學博士　小島昌太郎

說苑

琉球の天然資源と人……法學博士　山本美越乃

コンツェルンに就いて……經濟學士　磯部喜一

委任經理に就いて……經濟學士　楠見一正

フィジオクラートの價値論……經濟學士　山本勝市

雜錄

合理化方法としての經營設備の改造……經濟學士　大塚一郎

法令

米及麥ノ輸入制限ニ關スル件・昭和三年勅令第二十號ノ施行ニ關スル件・前年度豫算ヲ施行スルノ件

保險學の本質

小島昌太郎

一　保險學の意義
二　經濟學と經營學
三　經濟學の一分科としての本質的なる保險學と、經營學の一分科としての謂はゆる保險學
四　獨逸保險學協會の見解
五　保險學と保險論

一　保險學の意義

保險學は、社會生活を營む人類が、交換原則の下に於て、その所要の物的資料を、未來の偶然なる變化に處して、尙ほ、確實に獲得使用するを可能ならしめんことを工夫する所の現象を、研究する學問である。

一般に、人類が、交換の原則の下に於て、その生活に要する物的資料を獲得使用する所の現象を研究對象とするものは、經濟學である。保險學は、もとより、この一般的經濟現象を研究の對

象とするものではない。たゞ、そのうちより、人類が將來を考慮し、その偶然なる變化を豫想し、かゝる變化に遭遇することあるも、生活に要する物的資料を、尙ほ、確實に獲得使用することを得んがため、その目的に適當する所の、現在より未來への、準備をなすの現象、卽ち保險と名づけらるゝ現象を抽き來つて、之を研究の對象とするものである。故に、保險學は、全然、經濟學の內にあるもので、その外にあるものではなく、經濟學の一分科たるものである。

若し、經濟學を以てマーシャルの言ふが如く、[1] a study of mankind in the ordinary business of life; it examines that part of individual and social action which is most closely connected with the attainment and with the use of the material requisites of wellbeing と見做し得るものとするならば、保險學は a study of mankind in the special business of life which they carry on in consideration of future uncertainty; it examines that part of individual and social action which prepares a reliable means to secure the attainment and use of material requisites of wellbeing, especially in unexpected changes in the unknown future と言ひ得るであらう。

保險といふ現象は、一つの經濟現象である。卽ち、交換原則の下に於て、人類が物的資料の獲得使用をなすについて生ずる所の一つの組織的行動である。それは一般の經濟現象と同樣に、物

1) Alfred Marshall, Principles of Economics, eighth edition, p. 1.

的資料の獲得使用が交換原則の下に行はるゝ場合にのみ存在するもので、交換の原則によらずして、人類がその欲求若しくは必要に應じて、物的資料の獲得使用をなし得る場合には、保險もまた存在しない。こゝに交換の原則といふは、均等價値交換の原則である。詳しく言へば、人が、その欲求する所のものを他人より得るがためには、その他人が承認する所のものを、その承認する質、量、數に於て提供するを要すとするの定めである。

交換原則なるものは、私有權を基礎とする。卽ち私人所有權を認め、その不可侵を尊重するが故に、人がその欲する所のものを他人より獲るがためには、その他人の承諾を必要とし、この承諾を得るがために、自己も亦その他人の欲する所のものを提供せねばならぬのである。この交換の原則の下に於ては、社會を組織する各人の物的生活は、交換又は賣買によりて有機的に結合せられ、之によりて、いはゆる社會經濟なるものを組成するのである。併し各人の物的生活は、この制度の下に於ては、原則として、各自の責任の下に營まれ、從ひそが困窮衰亡することあるも、社會經濟そのものは、その組成員に對して何等救濟の責任をもつものではない。

また、交換原則の下に於ける物的生活に於ては、その交換は主として金錢卽ち貨幣を以てその媒介となし、賣買の形式によつてこれが行はれる。從つて各人の物的資料に對する欲求は、一般に、金錢上の必要といふ形式に於て發生することゝなる。また、各人の經濟は、一方に於て貨幣

收入があり、他方に貨幣支出があつて、その兩者が均衡を保つことを得て、初めて安定の狀態にあり得るのである。

かくて、各人は、その組成する所の社會經濟よりは、何等生活上の保障が與へらるゝことなく、彼等各自が日常獲得する所の所得が、その物的生活を維持する唯一の資料である。從つて、かゝる制度の下に於て、一度び何等か豫期せざる偶然の事件によりて、所得以上に支出をなすの必要が生ずるか、若しくは、その事件の結果として所得が減少し又は之を喪失することがあるならば、彼等は、金錢上の必要ありながら、この必要を充すことが出來ない、といふ窮狀に陷ることゝなる。卽ち、こゝに經濟生活の不安定の原因が存在するのである。

保險は、この不安定なる經濟生活を安固ならしめんがために生じたる一つの經濟上の仕組である。尤も、經濟生活の不安定を除去するの方法としては、保險の外に幾多のものがある。卽ち、前述の如く、その不安定の原因は、所得を減滅せしめる事件、又は日常の所得以上に支出を必要ならしむる事件が、偶然に、豫期しないうちに發生することにあるのであるから、かゝる事件をして發生せしめない手段を盡すことも、または縱ひそが發生しても、その勢力を消滅せしめ若くはそれの他に波及することを防ぐの方法をとることも、經濟生活を安固ならしむるものである。併し、かくの如き、豫防、鎭壓、防衞と稱せらるゝ所の技術上の手段は、事件そのものに對して

直接に加うるものであるから、經濟生活を安固ならしむるについて寧ろ根本的のものと認め得るものであり、且つかゝる手段は、科學の進歩によつて次第に發達しつゝあるのであるが、今日の狀態に於ては、未だ到底これのみによつて、經濟生活を安固ならしめ得るの域に達して居ない。

そこで、これらの技術上の手段も固より必要ではあるが、之と共に第二の手段を必要とする。卽ち、縱ひ右の如き事件が發生しても、これが經濟上に及ぼす結果だけは排除するといふ方法である。換言すれば、右の如き事件が發生しても、その結果として經濟上の窮狀に陷ることなきの準備を設けて置くことである。かゝる準備を經濟準備（wirtschaftliche Vorsorge）といふ。

經濟準備には、その主要なるものに二種ある。一つは貯蓄（Ersparung）であつて、他の一つが、本論の主題とする所の保險（Versicherung）である。

貯蓄は、時を追ふて物的資料若しくは貨幣を蓄積することである。故に、一定の目的のために必要とする額にまで之を蓄積するには、相當の時の經過を必要とする。それがため、發生するかしないかも分らず、又何時發生するかも測り知り得ない所の偶然なる事件に對する經濟準備としては、貯蓄は頗る不適當不完全である。然るに、保險は、各〻一つの經濟單位を構成して居る所の多數の人が共同して、偶然なる事件も多數の集團に於ては或る規律性があるといふ原則に基いて、かゝる事件の發生の割合を合理的の方法によつて豫測し、之に從つて彼等各自が少額の醵金

をなし、之を以て彼等の共同の目的に役立たしむる所の經濟準備を設ける仕組である。故に、偶然に發生する事件に對する經濟準備としては、頗る適當且つ完全なるものといふことが出來る。保險學は、卽ち、かくの如き經濟準備に關する經濟現象を研究する學問である。

二　經濟學と經營學

保險は、右に述べたるが如く、本質的に一つの經濟現象であるから、保險學（Versicherungswissenschaft）が、その本質的領域を經濟學（Wirtschaftwissenschaft）にもつことは何等の疑ひなき所である。併し乍ら、保險はまた、之を一つの事業として營むもの丶立場からも、または、保險事業に於ける一加入者たるもの丶立場からも、之を研究することを得るはいふまでもない。前者は、保險事業の經營に關する研究であり、後者は、家計若しくは經濟事業の經營上に於ける保險利用の研究であつて、これらは、共に、經濟學に於て、その本質的なる研究項目たるものではなく、寧ろ後に述ぶる所の經營學（Betriebslehre）なるもの丶一研究項目たるものである。

その中、保險事業の經營に關する研究は、保險事業を經營するについて必要なる種々なる智識、並びにこれが經營に役立つ所の種々なる智識を綜合するものであるから、正にそれ自らが、獨立して、經營學の一分科たり得るものである。この經營學たる保險の研究をも、世にはこれを

保險學と稱するものがある。獨逸保險學協會（Deutscher Verein für Versicherungswissenschaft）が、採用せる見解の如きは、後に詳論するが如く、この類に屬するものである。故に、私は、この經營學の一分科たる所の謂はゆる保險學と、經濟學の一分科たる本質的なる保險學との區別を明かにせなければならぬ。そして、そのためには、姑く、經濟と經營との關係、並びにその區別について述ぶる所あらねばならぬ。

經濟と經營とは、共に、人類が物的資料を獲得使用するの狀態に存する二つの相である。私の解する所によれば、經濟とは、前にも一言したるが如く、交換原則の下に於て、人類がその生活に要する物的資料を獲得使用するによりて生ずる所の有機的現象であり、經營とは、一つの指導意思により、人類がその生活に要する物的資料を獲得使用する所の組織的行動である。經濟は必ず交換原則の下に存し、經營は必ず指導意思の下に行はる。經濟には、指導意思の存在を要件としないことは、國民經濟、世界經濟の例に見て明かであり、經營が、交換原則と必ずしも併存せざることは、原始時代並びに想像せらるゝ所の純然たる共產社會の狀態に於ける人類の物的資料の獲得使用が、正に之に外ならざるに見ても、容易に理解せらるゝ所であらう。

右に述べたる經濟と經營との意義は、最近私の結論し得たる所のものであるから、通說との比

較上多少の說明を加へて置かなければならぬ。

經濟なるものゝ特性の一つとして、交換原則なるものをとり來り、exchangeability といふことを以て economic と uneconomic との區別の標準とすることは、以前には一度び廣く經濟學者によりて採用せられた所であるが、その後、殊に最近には、全く捨て去られた所の說である。例へば、キャナンはその著「富」に於て、この說を不可とするの理由として、次の如くに言ふ。

「數十萬の人々が每週ハイドパァークの使用によつて享樂する所の滿足が、經濟上の滿足であることは、如何なる經濟學者も否認せないであらう。併し、かくの如き「種類の」滿足が、縱ひ潛在的性質に於ても、交換し得べきものであるとか、又は賣買せられ得るものであるとは、決して言ひ得ないであらう。また、假に、火星には、吾々の如き人類が住んで居り、火星人も丁度吾々のなすが如く、衣食住において生活して居るといふことが發見せられたとして、經濟學者が、火星人と吾々との經濟狀態の比較をなさんとする場合に、更に新らたなる發見によつて、火星人は私有財產制度を設けて居らず、また交換をも行つて居ないことが明らかにせられたとしても、彼はその比較を「不可能の故を以て」廢めることはないであらう。……更に、賣買といふ標準は、通常、經濟學に於て取扱はれて居らず且つ經濟學に於て取扱はるゝことを便宜としない所の多くの事物を、經濟學に持ち來すことゝなる。人類の歷史あつてこの方、(且

つ疑ひもなくその以前から）或種の性的滿足を供給することに於て、莫大な取引が存在して居つたが、それは決して經濟財とは認められないものである。宗教や道德に對する反逆と認めらるべきものを犯すとの許可が、或時代には公然と賣渡され、また僅な變裝の下には如何なる時代にも賣渡されて居るが、如何なる人もこれらを經濟財とは認めないであらう。[1]」

人類が、物的資料を獲得使用して生活する現象につき、經濟といふ概念と、經營といふ概念とを別々に組立てることをしないで、人類の物的生活そのものを以て直ちに經濟と認めんとする人々にとつては、交換性といふことを以て經濟の特性と認むることに何等か論理上の不安を感ずるは、當然の事柄である。キャナンの如きは、economic と uneconomic との區別として、明瞭なる標準を索めて結局成功せず、たゞ a second best description として、單に material welfare に關するものを以て economic となすものであるから、[2]人類の物的生活に經濟と經營との二相あるを明かにせざるものである。既に、經濟に對比する所の經營の概念を明かにしない以上は、彼が右に紹介したる如き考をもつも、當然であるといはなければならぬ。

併し、一度び Wirtschaft と Betrieb とを概念上、はつきり區別して、理解するならば、キャナンの如き考の無用であり且つ誤謬であることが明かとなるであらう。私をして言はしむれば、キャナンの擧げたる例に於て、火星の場合には、經營があるだけであつて、經濟はなく、火星人と

1) Cannan, Wealth, p. 14, 15.
2) ibid., p. 17.

吾々とに於て、比較の問題となり得るものは、經濟や經營といふ意味のものではなくて、たゞ物的資料の獲得使用による生活といふ意味のものである。而して、ハイドパァークに於ける滿足は、吾々が花鳥風月を樂むの滿足と種類を同じくするもので、明かに經濟上の滿足ではなく、性的滿足の取引や、犯罪や不道德許可の賣買は、そが賣買せらるゝ限りは、嚴然として經濟上の性質をもつこと、一般商品と異る所はない。

かくて、私は、經濟には交換の原則の行はるゝことを要件と認むるのであるが、それと均しく經營には、指導意思の存在を要件と認むるのである。指導意思といふは、何等かの目的をもつ所の意思である。故に、或は單に目的といつてもよい。人間の行動を指導する所の意思である。この意思は、行動者自身がもつことあり、或は行動者以外のものが之をもちて行動者をその命により行動せしむることもある。卽ち、經營に於ては、物的資料の獲得使用を何等かの目的に適合する樣に行ふ所の、若くは行はしめらるゝ所の、組織ある行動が存在することがその特質である。そして、それは、必ずしも交換原則の下に行はるゝを要しないけれども、またその下に行はるゝことも、もとより可能なるものである。經營が交換原則の下に行はるゝ場合には、經營と經濟とが同時に存在する。今日に於ては、經營は、總て經濟と同時に存在する。卽ち、國家の財政も一

つの經營であり、國家の行ふ所の各種の經濟上の政策、卽ち關稅政策、金融政策、取引所政策、等の實行はいづれも各〻經營であり、更に會社の經濟といはるゝものも一つの經營の下にあるものであり、家計も一つの經營であり、また、學生が、父兄より受くる一定の學資を以て每月の生活を營むも一つの經營である。

經營といふことを以て右に述ぶるが如く、一つの指導意思により、人類が、その生活に要する物的資料を獲得使用する所の組織的行動であると解するならば、この經營といふことは、頗る近代的意義をもつことゝなるから、それは漸く近代に至つて發生したる現象であるが如く見ゆるけれども、實は、人類が交換原則によつて物的資料の獲得使用をなす制度を創むる以前より、既に存在したる所である。卽ち、例へば、かの遊牧民族といはるゝものが、その生活を營むにつき、氣候風土に應じ、牧草の存否を考慮し、一定の目的方向を定めて、之に從つて群畜を牧養したるは、正に、この經營である。獨逸語に於ては、經營を Betrieb といふのであるが、この言葉は群畜を牧養することを意味する所の働詞 treiben より出でたるものである。故に私は、この二つの言葉自體の關係より見て、經營といふ概念の淵源は、遠く、遊放民族時代に在ることを想像するものである。そして、その後、分業が起り、物的資料の獲得使用が交換原則の下に行はるゝやう

になり、貨幣が交換の媒介たる役目をつとむることゝなりて、經濟といふものが發達してからは、經營はすべて社會經濟に包被せらるゝことゝなつたのである。

今、經營が經濟に包被せられたる推移を考うるに、人間が他人との、殊に多數の他人との、同時生活の場合に於ては、何等かのものにより、彼等の物的資料の獲得使用が統制せられて居らなければならぬ。然らざれば、生活の安寧を望むことを得ないからである。故に、多數人の物的資料の獲得使用が、或一人の力、若しくは意思によつて、統制せられ得る場合には、例へば前述の遊牧民族の如き場合には、物的生活は單に經營の下に行はれて居つた。然るに、社會關係が次第に複雜となり、一方に於ては、一つの社會をなす所の多數人の團體内に於て、生産する所のものが多種多樣になり、謂はゆる分業が行はるゝことゝなると共に、他方に於ては、或一人の力を以ては、到底、各人の物的資料の獲得使用を統制し得ざるほどに、その社會が擴大するに至つては、或一人の指導意思は、この社會の構成員たる各人の物的資料の獲得使用に對する統制力を失ふことゝなる。かゝるときに至つて、或一人の指導意思に代つて、次第に統制作用を現はすことゝなつたものが前に述べたる交換の原則なるものである。かくて、今日見るが如く、交換の原則によりて、人類の物的資料の獲得使用が統制せられ、これによりて各人を連帶的に結び付くる所の有機的組織が生じたのであるが、それが卽ち經濟である。故に經濟それ自らには、何等の指導意思はない。たゞ、この經濟のうちにある所の、各個人若しくはその小集團の物的資料の獲得使

用は、もとより何等かの指導意思によりて行はるゝのである。故に、こゝには、依然として、經營がある。併し、この場合の經營は、經濟と併存し、それに包被せられたる經營であつて、前に述べたるが如く、國家の財政も、株式會社の事業も、一家族の家計も、皆かくの如きものである。

かくて、吾々の物的生活に於ては、交換原則によりて有機的に構成せられたる世界經濟、若しくは、社會經濟、或は國民經濟といふものゝうちに、或は併立し或は重複する所の幾多の經營があつて、そのうちにあつて物的資料の獲得使用をなして居るのである。故に、吾々が、物的資料を生産若しくは消費する範圍内の行動は、必らず一つの經營のうちにあるであるから、それは何等かの指導意思によりて行はれる。併し、之を大きく包被して居る所のものは、世界經濟、社會經濟若しくは國民經濟であるから、そこには指導意思はなく、交換の原則が支配をして居て、これによりて自働的な統制作用が行はれて居るだけである。

世界經濟、社會經濟並びに國民經濟といはるゝものには、交換原則が統制作用を行つて居るといふものゝ、之を統一的に總括する所の指導意思がないから、之に包被せらるゝ所の各個の經營(謂はゆる個別經濟)の指導意思が、相互に完全なる聯絡を缺き或は全般的なる生産消費に關す觀測を誤り、或は誤解に基く判斷によりその行動を律し、それがため世界經濟、社會經濟並びに國民經濟の發達に累を及ぼすことがある。生産過多、恐慌、失職群衆の發生の如きは、これである。故に、人類の物的資料の獲得使用は、全般的に、之を一つの指導意思——一個の自然人の指

導意思若しくは多數自然人の合議による所の指導意思――によりて統括せんことを考案するものがある。かくの如き企劃は、生産物が各人の欲求を充すに豐富であり、各地方の生産消費の狀態に關し甚だ正確なる判斷をなし得る明智があり、生産物の配給につき澁滯する所なき圓滑なる行動をなし得るの組織が備はり、且つ統制者に絕大の權力があるのでなければ、十分なる效果を期待し得るものではない。併し假にかくの如きことが行はるゝものとせば、その場合には、交換原則による自働的統制が廢せられて、指導意思による意織的統制が行はれ、それによりて人類の物的資料の獲得使用が行はるゝのであるから、已に經濟といふものが消滅して、また經營のみが存在することゝなる。

經營といふ概念は、最近に至り、多くの學者によりて用ゐらるゝやうになつたものであるが、未だ通說と認むべき程度にまでも意見の一致を見るに至らないものである。私が右に述べたる經營の概念も、私一個の說であつて、未だ如何なる學者によつても稱へられざる所のものである。元來、經營といふ概念が經濟學者によつて用ゐられたのは、主として、企業（Unternehmung）と對立してであつて、かのカールテル及びトラストの研究に隨伴して生じたものである。そして、或は、企業は統一的指揮の下にある事業單位（geschäftliche Einheit）であり、經營は經濟活動の場所的並びに人的の單位（örtliche und persönliche Einheit wirtschaftlicher Betätigung）であると

說くものあり（シュモラア）、[1] 或は、單に、企業は經濟的單位（wirtschaftliche Einheit）であり、經營は技術的單位（technische Einheit）であると稱ふるものがあり（フックス）、[2] 或は經營に廣義と狹義とを分ち、廣義に於ては、「繼續的作業の目的を達するための仕組」（Veranstaltungen zum Zwecke fortgesetzter Werkverrichtung）であつて、狹義には作業經營（Werkbetriebe）と經濟經營（Wirtschaftsbetriebe）又は利用經營（Verwertungsbetriebe）の二つがあり、企業とは資本家的經濟組織の經濟形態であつて、抽象的なる一單位をなすもので、事業（Geschaft）といはるゝものであるといふものがある（ゾムバルト）。[3] かくの如く、企業と對比せらるゝ經營の概念については、その說に殆ど歸一する所なきかの觀があつた。併し、また、大體に於て經營を以て技術的方面のものと認むるが如き點に於ては、一致するやうでもあつた。

然るに、近來、更に、獨逸に於ては、謂はゆる經營經濟學（Betriebswirtschaftslehre）若しくは私經濟學（Privatwirtschaftslehre）なるものが盛となり、パペ、ライトナア、ニクリッシュ等の研究[4]が發表せられたが、それらに於ても經營は要するに經濟行動に於ける技術的方面に關するものであるといふ點に於ては、その見方に變化なきが如くである。併しその謂はゆる技術的といふは、工業的若しくは自然科學的技術だけを意味するのではなく、商業的技術若しくは營利的技術、及び算數會計的技術をも寧ろ多く意味することになつたのは、幾分か經營といふ概念の變遷

1) Schmoller, Grundriss der allg. Volkswirtschaftlehre, I Teil, S. 461.
2) Fuchs, Volkswirtschaftslehre, S. 91.
3) Sombart, Der moderne Kapitalismus, 6 Aufl., I Bd. S. 10, 12; 321.
4) Pape, Die Allgemeine Betriebswirtschaftlehre und ihre Stellung zu verwanten Disziplien; Zur Entwicklung der Betriebswirtschaftslehre,

を現はすものであらう。

この企業と對比する概念としての經營は、私をしていはしむれば、前に述べたる意義に於ける經營の狹義に當るものと見做すべきものであつて、この場合には、「一つの（統一せられたる）營業政策の下に營まるゝ事業組織」であると解し、これに對比する所の企業を以て、「損益歸屬の主體たる所の經濟單位」であると解するものである。卽ち、廣義の經營に於ける「一つの指導意思により」といふものは、狹義の經營に於ては、「一つの（統一せられたる）營業政策の下に」といふことゝなり、廣義に於て、「人類がその生活に要する物的資料を獲得使用する所の組織的行動」といふものは、狹義に於ては、單に「事業組織」となるのである。私が、如何にして、企業及び經營をかくの如くに解するに至りたるかといふことについては、從來の諸學說に對する批評と、右の私の說に對する若干の說明とを必要とするのであるが、そは本論に直接關係するものでもないから、之を別の機會に讓り、こゝには、經營學としての保險學なるものを說明するの順序として必要なる範圍にこの說明を止めなければならぬ。たゞ、私のこの說にやゝ近きものとして、パアペの次の文言を擧ぐることは必ずしも無用のことではあるまい。

「私の見るところによれば、經營といふ言葉には、經濟上、物を作り上げ形成すると要素（das moment des ökonomischen Erarbeitens und Gestaltens）が寧ろ多く言ひ表はされ、企業と

1925. S. 40-53; Leitner Privatwirtschaftslehre der Unternehmung; Nichlisch, Wirtschaftliche Betriebslehre.

いふ言葉のなかには、資本的損失の恐れある投機的關係の考へが、優れて居る。[1]」

さて、經濟の意義、並びに經營の廣狹の二義は、右に述べたる所によつて明かになつたこと、思ふ。保險學が、その本質的領域を證く所の經濟學は、この經濟を研究客體とするものである。即ち、人類が、その生活に要する物的資料を、交換原則の下に於て、獲得使用するによりて生ずる所の有機的現象の本質と作用とを研究する學問である。この學問に於ては、右の本質と作用との闡明それ自體にその使命があり、この學問を構成する所の智識は、この本質と作用とを闡明することを中心として體系付けられて居るのである。そして、それらの智識が何等かの目的に役立つや否やは、學問の成立に關係なき所である。

經營學には、廣義の經營を研究客體とするものと、狹義の經營を研究客體とするものとがある。前者は、一つの指導意思により、人類がその生活に要する物的資料を獲得使用する所の組織的行動について研究するものであつて、單に、經營學といふべきものであり、現在に於ては未だその完き形のものが出來上つては居ないけれども、財政學並びに經濟政策學（Wirtschaftpolitiklehre）などは之に屬するものである。後者は、一つの營業政策の下に營まるゝ事業につき研究するのであつて、或種の事業に於ては、その目的を達成するために、如何なる事業組織を以てし、

1) Pape, a. a. O., S. 40–41.

如何なる營業政策をとるべきであるか、その營業政策を最も完全に遂行するには如何なることをなすべきであるか、といふことを研究するのである。謂はゆる經營經濟學（Betriebswirtschaftslehre）なるものはこれである。學者によりては、之に私經濟學（Privatwirtschaftslehre）なる名稱を與うるものもある。この廣義若しくは狹義の經營に關する研究は、いづれの場合に於ても、もの丶本質若しくは作用を闡明するを以てその使命とするのではなく、或は指導意思といひ、或は營業政策といはる丶所の、何等かの目的に役立つことを以て、この學問の使命とするのである。卽ち、この學問を構成する所の智識は、單に或る目的に役立つといふことのために、種々なる學問のうちより選拔し來つて綜合せられたもので、それらは各〻それ自らの素質に於ては、かくの如き綜合の下にありては一つの體系に組織付けらるべき聯絡を缺き、從つて一つの種類を形成するの共通なる素質をもたざるものである。故に、經營學なるものは、或目的に役立たしむるがために種類を異にする色々な智識を綜合して成立つものである。

經營に關する學問は、廣義に於ける經營を研究對象とする所の、單に經營學と稱するものに於ても、または、狹義の經營を研究對象とする所の謂はゆる經營經濟學なるものに於ても、要するに、廣く言へば物的資料の獲得使用に、狹くしても一つの營業政策の遂行に、役立つ所の諸種の智識の綜合であるから、この學問の內容を構成するもの丶うち、最も重きをなすものは、今日に

於ては、經濟に關する智識である。卽ち、交換原則に支配せらるゝ物的生活を基礎として發展せる現象に關する智識である。故に、經營學は、最も多く經濟學の智識より成り立つ。併し、これにありては、或目的に從立つといふ關係に於て、經濟學の智識が集められてあるだけであつて、經濟學それ自體に於けるが如く、如何なる目的とも關係なく、たゞ智識自體の相互關聯性によりて體系をなせるとは全く趣きを異にするものである。殊に、經營學は、今日に於ても、經濟學の智識のみより成立するものではなく、法律學、會計學、數學の智識の如きは、缺くべからざるものであり、その外、目的の如何によりて、自然科學に屬する學問の智識を必要とするものである。卽ち、經營學は、經濟學、法律學、會計學、數學を初めとして、美學、心理學、社會學、及び、それ自體既に自然科學よりの一つの應用學である所の、例へば機械工學、建築學、電氣工學、製造化學、衞生學、醫學、等の智識を綜合し、之を或目的へ應用するの學問である。故に、經營學は、この點に於ても、經濟學と異り、全然一つの應用學たるものである。

三　經濟學の一分科としての本質的なる保險學と、經營學の一分科としての謂はゆる保險學

かくの如く、經濟學と經營學との區別を立てゝ、さて、保險に關する學問の所屬を考へて見るに、保險といふ現象は、前に述べたるが如く、私有權を基礎とし、交換原則の下に人類が物的資

料を獲得使用する場合にのみ存在するものであつて、若し各人が、その必要に應じて、若しくはその欲求に應じて、物的資料の獲得使用をなし得るものならば、保險なるものは存在せざるものである。卽ち、保險は經濟と終始する所の社會的現象である。故に、保險學は、その本質に於て、あくまでも經濟學であることは、何等の疑ひがない。

然らば、保險學は、經濟學に於て、如何なる理由により獨立の一部門を構成するか。それは、保險といふ現象は、他の經濟現象と或る點に於て全く異る特殊性を有するからである。卽ちフュルゼ[1]の言へるが如く、保險に於ては、偶然の克服のために偶然の利用(die Ausnutzung des Zufalls zur Ueberwindung des Zufalls)といふことがその特性をなすが故に、他の經濟現象と異る事象を呈し、特殊の法則の下に立つからである。詳しく言へば、保險は前に述べたるが如く、偶然なる事件によりて將來に於ける物的資料の獲得使用が妨げらるゝことなからしむるために、その偶然なる事件に遭遇するの可能ある多數の場合を大數法的に觀察して、之に一定の規律あることを發見し、之を基礎として經濟準備をなすの仕組である。故にこの保險に於ては、經濟行爲が特殊なる一定の計劃の下に行はれ、それを規律する所のものは、個々の場合に於ける偶然が多數の場合には消滅するといふ法則である。これあるがため、保險は經濟現象のうちにても特殊性をもち、また之を研究客體とする保險學が經濟學の中に於て獨立の一部門を構成するのである。

1) Hülsse, Versicherungswissenschaft und Versicherungskunde, in der Zschr. f. d. g. Versicherungswissenschaft. Bd. 17., 1917., S. 49.

保險學は、右に述ぶるが如く、その本質的領域を經濟學にもちて、獨立の一部門を構成するものである。

併し乍ら、之を他の方面より觀察するならば、保險は、前述の如く、人類が、未來の偶然なる變化に處して、尙ほ、確實に、その所要の物的資料を獲得使用するを可能ならしめんとする所の目的を以て、組織的行動をなすことであるから、その意味に於て、物的生活に於ける經營の一部面をなすものである。卽ち、被保險者若しくは保險契約者の側より見ても、保險は、彼の家計若しくは企業に於ける經營の一部面を構成するものである。更に、保險はその實行上、右の如き目的をもつ所の多數の經濟主體を集合し、彼等より醵金を徵集して、また之を、彼等のうち一定の事件に遭遇したるものに一定の金額を以て支拂ふといふ組織をとることを必要とし、且つその局に當るものを必要とする。故に、かゝる組織的行動自體が一つの經營であり、その局に當るもの、卽ち保險者は、この經營の主體であり、この經營に於ける指導意思の發動者である。

かくの如く、保險は、之を、被保險者若しくは保險契約者の立場より見ても、また、保險者の立場より見ても、一つの經營と認め得べきものである。故に、保險は又之を經營學の研究客體としても、取扱ふことが出來る。被保險者若しくは保險契約者の立場よりする保險の研究は、經營

學のうちにても、更に家計學若しくは謂はゆる經營經濟學の一部門である。北米合衆國に於ては、「投資としての生命保險」とか、「會社企業に於ける火災保險の利用」とか、若しくは、「貿易金融の手段としての海上保險」とかいふ題目の研究が行はるゝやうであるが、これらはこの類に屬するものである。保險者の立場よりする保險の研究は、最も古くより行はれたものであつて、かのアクチュアリ學(Actuarial science)と稱するものは、その最も著名なるものである。之は、生命保險事業の經營に必要なる所の各種の事項を內容とするもので、主として人類生命の研究に於ける蓋然率論の應用、並びに、利息算年金算の研究と、保險に關する法規解釋とより成立つものである。このアクチュアリ學の如きは、明かに謂はゆる經營學の特殊なるもので、アクチュアリ――生命保險事業に於て主として數理方面の事務を取扱ふ人――の職務を行ふに役立つ學問といふ意味よりその名稱が出たものである。

このアクチュアリ學なるものは、英吉利に於て出來たものであるが、獨逸に於ては、之に倣つて、單に生命保險ばかりではなく、他の種類の保險についても、その事業の局に當るものに役立つ所の科目を研究教授する設備を設けた。それが、ゲッチンゲンの保險ゼミナールである。こゝでは、生命保險や火災保險だけではなく、總ての主要なる保險事業を營むに必要なる科目が、經濟學、法律學、數學、工學、醫學の智識のうちより撰拔して、教授せられ、それを一括して保險

學と名づけて居る。併し、それは言ふまでもなく、經營學而も主として謂はゆる經營經濟學としての研究である。

かくの如く、保險と經營學との關係に於ては、一個の家計、一個の事業を經營する上より保險を研究することもあれば、また保險事業を經營する上よりして、それに關聯する所の諸々の事柄を研究することもある。殊にこの後者に對しては前述の如く保險學の名稱を與へるものがある。

四　獨逸保險學協會の見解

獨逸保險學協會（Deutscher Verein für Versicherungswissenschaft）が、その會則に於て定義したる保險學の意義は、獨逸に於ける保險學者の多く採用する所のもので、我國に於ても全く之と同じ見解をとるものがある。その定義にいふ。"Unter Versicherungswissenschaft werden hier sowohl die rechts- und wirtschaftswissenschaftlichen, wie die mathematischen und naturwissenschaftlichen Wissenzweige verstanden, deren Bestand und Fortbildung dem Versicherungswesen dienlich sind."　卽ち、「こゝに、保險學とは、法律學、經濟學、並びに數學及び自然科學の智識のうちにて、その存立と進步とが、保險に役立つ所の部分である」といふのである。この見解は、ドルンの[1]解說する所によれば、保險學を以て、保險經濟、保險法律、保險技術、保險醫事よりな

1) Dorn, Artikel "Wissenschaft" im Versicherungslexikon, Zweite Aufl. S. 1458.

る所の一種の集合科學（Sammelwissenschaft）と見るものである。

この獨逸保險學協會の定義する所の保險學なるものは、前にも言及したるが如く、經營學としての保險學である。その謂ふ所の保險學は、保險といふものに役立つ所の、寧ろ詳しく言へば保險事業を營むについて役立つ所の、諸種の學問の智識の集合であるからである。ロールベックはこの定義を批評して、かくの如きものは Versicherungswissenschaft といはんよりは、寧ろ Versicherungstechnik と言ふべきものであるといふ。[1] 併し、私は之を更に Versicherungskunde といふ方がよく當るものであると思ふ。

今、Wissenschaft と Kunde との區別を考ふるに、私の解する所によれば、Wissenschaft は Wissen 卽ち智識そのものである。詳しく言へば、檢討せられて一つの體系に組織付けられたる智識である。Wissenschaft 本來の面目に於ては、それが何等かのものに役立つと否とに關係なくして成立するものである。併し、それは apriorisch な智識によりて檢討せられたる智識なること、若しくはその根底に於て apriorisch な智識によりて檢討せられた所の智識より發展したる智識なることを要する。何等の檢討を經ざる智識は常識である。また、それは、檢討せられた多數の智識が、一つの體系に組織付けらるゝことを要する。卽ち之によりて、統一せられたる一つの種類を構成する智識たることを要する。更に、何等の體系をなさゞる智識は Wissenschaft ではな

1) Versicherungslexikon, Zweite Aufl. S. 1458.

い。色々な種類の智識が單に集合するだけでは、それは何等の Wissenschaft とはならない。Kunde は、之に反し、或目的に應用せられ得る狀態に配置せられたる智識である。それは、勿論一つの種類より成り立つものではなくて、幾多の種類の智識より成り立つことが出來る。既に一つの體系に組織付けられて Wissenschaft を構成する所の智識も、また、未だ一つの體系に組織付けられざる智識も、その選ばれたる目的に役立つものなる限り、その目的を中心として配列せられたるときは、一つの Kunde を構成することゝなる。Wissenschaft を以て、純正科學と稱し得るならば、Kunde は應用學と稱し得るであらう。前に述べたる經營學の如きは、或る選ばれたる目的に從つて、物的資料を獲得使用するに役立つ所の種々なる智識の集合であるから、こゝに言ふ所の Kunde である。

さて、保險學は一つの Wissenschaft である。保險といふ經濟現象に關する智識であつて、經濟學的智識により檢討せられ、一つの體系に組織付けられたるものである。それは保險事業に役立つことを目的として成立するものではなくして、たゞ智識自體の性質により一つの體系に組織付けらるゝことによりて成立するものである。獨逸保險學協會の定義の如きは、保險事業に役立つことを目的として寄せ集めたる、法律學、經濟學、數學、自然科學の智識の集合を以て、保險學

といふのであるから、それらは、渾然たる一つの種類に屬する智識の體系をなせるものを言ひ表はすのではない。故にそれは Versicherungswissenschaft の名に値せざるものである。併し、それは、法律學、經濟學、數學、自然科學の保險への應用であるが故に Versicherungskunde の名を與うるならば、正に適當なるものである。

或は、法律學、經濟學、數學、自然科學等の智識が、保險に應用せらるゝことにより、保險を中心として一つの關係の下に立つがため、それによりて一つの體系が成立し、一つの種類に統一せられ、一つの獨立の Wissenschaft が成立すると考ふるものがあるかも知れない。若しかくの如くに考ふるものがあるならば、そは學問なるものに對する理解を缺くものである。例へば、今、私の机の上には時計がある、インクがある、原稿紙がある、書物がある。これらは、その Kategorie について言へば、時計、インク、紙、書物、以上の何物ともなり得ない。それが私の机の上にあり、この論文の起稿に役立つといふことによりて、何等の獨立の種類を構成するものでもなく、何等の體系に組織付けられ得るものでもない。法律學、經濟學、數學、自然科學、――かくの如き並べ方は甚だ非分類的であるが、私の批評が、獨逸保險學協會のかくの如き並べ方による保險學の定義を材料として出發して居るから、姑くこの並べ方を用ゆるの外はない――が、法律學、經濟學、數學又は自然科學として成立し、集つて更に一つの科學とならざる所以は、その

對象とする所のものが、その本質に於て種類を異にし、從つて之に關する智識そのものも亦その種類を異にするの結果、縱ひこれらを集めても一つの統一的體系に組織付け得べきものでないからである。若しこれらが、保險と關聯してそれに役立つの點に於て、統一せられ體系付けられ得るものならば、保險と關係せざる以前に於て、既に統一せられ體系付けらるべき筈である。かゝる統一は、Wissenschaft たるの性質をもつものゝ範圍内に於ては、不可能であつて、Wissenschaft の埒外に出でゝ始めて或は可能なる所である。

右に述ぶるが如く、獨逸保險學協會の定義に示すが如きものは、Versicherungskunde に外ならざるものである。然るに、この Versicherungskunde なるものについては、更に別異の見解がある。フェルゼの如きは之につき次の如くに曰ふ。「Versicherungskunde は保險を或目的に役立つやうな利用を目的とするものであるから、その目的は經濟に於ける財貨使用を出來得る限り經濟的に確實ならしむること (möglichst wirtschaftliche Sicherung der Güterverwendung in der Wirtschaft) である。故に私經濟的の考へ方が Versicherungskunde の基礎をなす。保險思想の實行の必要が生ずれば、それによりて保險加入者の特殊經濟 (die gesonderte Wirtschaft der Versicherungsteilnehmer) が保險學の固有の客體となる。」[1]と。卽ちこの見解によれば、Versicherungskunde といふは、前に述べたる經營學としての保險學のうち、保險利用卽ち被保險者又は保險契約者の

1) Hülsse, Versicherungswissenschaft und Versicherungskunde, (Ztschaft, f. d. J. Versicherungswissenschaft, Bd. 17, 1917.) S. 45.

立場に於ける保險利用の研究である。併し乍ら、今日、均しく經營學としての保險學であつても、既に存在する所のものは、前にも述べたるが如く、保險事業の立場よりする研究であるから、この方に Versicherungskunde の名稱を與へるが寧ろ正しいと思ふ。

五　保險學と保險論

獨逸語には、Versicherungswissenschaft といふ言葉の外に、Versicherungslehre といふ言葉もある。前者が保險學といひ得るに對し、後者は保險論といひ得るものである。Wörner の如きは、Versicherungswissedschaft は、保險といふ二つの經濟上の仕組が、人間に適應するの組織並びに事實の本質に關する智識の全體であるとなし、Versicherungslehre を以てこれらの智識の組織的叙述であるといふ。私はこの言葉の範圍内に於ては、その說は一部分正當でありまた一部分不可であると思ふ。併し、彼が更に之に引續いて、Versicherungslehre の内容たるものは、1. Versicherungsrechnung (Versicherungstechnik, Versicherungsmathematik) 2. Versicherungsbetriebsführung, 3. Versicherungsrecht, 4. Versicherungswirtschaft, 5. Versicherungsethik, 6. Technik der Schadenmeidung und Schadenunterdrückung, 7. Versicherungsmedizin より成るといふに至つては、私は前述の獨逸保險學協會の定義に對する批評を繰返すの外はない。

1) Wörner, Allgemeine Versicherungslehre, Dritte Aufl., S. 15 ff.

Versicherungswissenschaft と Versicherungslehre との關係を說明するには、一般に Wissenschaft と Lehre との關係を明にするが早道である。私の理解する所によれば Lehre といふは、智識を言語文章に表現したるものである。それが科學的智識たると常識たるとを問はない。故に今、Wissenschaft を構成する智識を言語文章に表現するときは、それは一つの Lehre である。wissenschaftliche Lehre といはるゝものである。Wissenschaft は、體系を構成する所の智識の全體であるが、併し之を言語文章に表現するには、その全體に於てなすも、又は單にその一部に於てなすも、いづれも可能である。故に一つの Wissenschaft の全體の表現であつても Lehre であり、又その一部分の表現であつても Lehre である。

更に之を表現したる言語文章について見るも、その言語文章たるの形式について言へば、Lehre 卽ち論、又は論文であるが、その內容について見れば、體系をなせる智識の全體又は一部、卽ち一つの Wissenschaft の全體又は一部である。これらの關係を見れば、Wissenschaft と Lehre とは、別のものでもあり又同一のものでもある。ミューズは美そのものであり、又美の現はれでもある。

Lehre は智識の表現であるが故に、それは Wissenchaft の表現であり得ると共に、又 Wissenschaft たらざるものゝ表現であることもある。卽ち、純正科學の表現が Lehre であると共に、

謂はゆる應用學たる Kunde の表現も、または政策の表現も Lehre である。Zwecklehre 及び Politiklehre なるものゝ存在し得るはこの故である。かの經營學の如きものも、私をして言はしむれば Betriebswissens-haft ではなくして、Betriebslehre といふが至當である。何となれば、それは anwendbare, praktische Lehre であるからである。

右に述べたる所によつて Versicherungswissenschaft と Versicherungslehre との關係を見るに、Versicherungswissenschaft といへば Versicherungswissenschaft より外なきものであるが、Versicherungslehre といへば、それは Versicherungswissenschaft の Lehre たることあり、Versicherungskunde の Lehre たることあり、また Versicherungspolitik の Lehre たることもあり得るのであつて、その內容を見ざれば、呼稱のみによりては如何なるものなるかを直ちに判斷し難きものである。——三・三・一四——